

紫陽花

泉鏡花作

第一章

色青く光ある蛇、おびたゞしく棲めればとて、里
人は近よらず。其杜は、片眼の盲ひたる翁ありて、
昔より齊眉けり。

其片眼を失ひし時一たび見たりと言ふ、几帳の蔭
に黒髪のたけなりし、それぞ神なるべき。

ちかきころ水無月中旬、二十日餘り照り續きたる、
けふ日ざかりの、鼓子花さへ草いきれに色褪せて、
砂も、石も、きら／＼と光を帯びて、松の老木の梢
より、絲を亂せる如き薄き煙の立ちのぼるは、木精
とか言ふものならむ。おぼる、／＼と霞むまで、暑
き日の静さは夜半にも増して、眼もあてられざる野
の細道を、十歳ばかりの美少年の、尻を端折り、竹
の子笠被りたるが、跣足にて、

「氷や、氷や。」

と呼びもて來つ。其より市に行かんとするなり。
氷は筵包にして天秤に釣したる、其片端には、
手ごろの石を藁繩もて結びかけしが、重きもの荷ひ
たる、力なき身體のよるめく毎に、石は、ふらゝこ
の如くはずみて揺れつ。

とかうして、此の杜の前に來りし時、太き息つき
て立停りぬ。

笠は目深に被りたれど、日の光は遮らで、白き頂
も赤らみたる、渠はいかに暑かりけむ。

蚯蚓の骸の干乾びて、色黒く成りたるが、なかば
なま／＼しく、心ばかり蠢くに、赤き蟻の群りて湧
くが如く働くのみ、葉末の揺るゝ風もあらで、平た
き焼石の上に何とか言ふ、尾の尖の少し黒き蜻蛉の、
ひたと居て動きもせざりき。

かゝる時、杜の裏の木蔭より婦人二人出で來れり。
一人は涼傘疊み持ちて、細き手に杖としたる、いま
一人は、それよりも年少きが、伸上るやうにして、
背後より傘さしかけつ。腰元なるべし。

丈高き貴女たけたか きぢよのつむりは、傘かさのうらに支つかふるばかり、
蒼あをき絹きぬの裏うら、眉まゆのあたりに影かげをこめて、くらく光ひかる
ものあり、黒髪くろかみにきらめきぬ。

怪あやしと美少年びせうねんの見返みかへる時とき、彼かの貴女きぢよ、腰元こしもとを顧かへりみ
しが、やがて此方こなたに向むひて、

「あの、少しばかり。」

暑あつさと、疲勞つかれとに、少年せうねんはものも言いひあへず、纒わづか
に顔うなじきて、筵むしろを解ときて、笹ささの葉はの濡ぬれたるをざわ／
＼と搔かきわ分けつ。

雫しづくお落ちて、雪ゆきの塊かたまりは氷室ひむろより切出きりだしたるまゝ、未いま
だ角かども失うせざりき。其その一角ひとすみをば、鋸のこぎりもて切取きりとりて、
いざとて振向ふりむく。睫まつげに額ひたひの汗あせつたひたるに、手ての塞ふさ
がりたれば、拭ぬぐひもあへで眼めを塞ふさぎつ。貴女きぢよの手てに
捧さぐげたる雪ゆきの色いろは眞黒まっくろなりき。

「この雪ゆきは、何どうしたの。」

美少年びせうねんはものも言いはで、直たゞちに鋸のこぎりの刃はを返かへし

て、さら／＼と削り落すに、粉はばら／＼とあたり
に散り、ぢ、ぢ、と蝉の鳴きやむ音して、焼砂に煮
え込みたり。

第二章

あきなひに出づる時、繼母の心なく嘗て炭を挽き
しまゝなる鋸を持たせしなれば、さは雪の色づく
を、少年は然りとも知らで、削り落し拂ふまゝに、
雪の量は掌に小さくなりぬ。

別に新しきを進めたる、其もまた黒かりき。貴女
は手をだに觸れむとせで、

「きれいなのでなくつては。」
と静にかぶりをふりつゝいふ。

「えゝ。」と少年は力を籠めて、ざら／＼とぞ搔
いたりける。雪は崩れ落ちて砂にまぶれつ。

澁々捨てゝ、新しきを、また別なるを、更に幾度
か挽いたれど、鋸につきたる炭の粉の、其都度雪を
汚しつゝ、はや残り少なに成つて、笹の葉に蔽はれ
ぬ。

貴女は身動きもせず、瞳をすゑて、冷かに瞻りた
り。少年は便なげに、

「お母様に叱られら。お母様に叱られら。」

と訴ふるが如く呟きたれど、耳にもかげざる状し
たりき。附添ひたる腰元は、笑止と思ひ、

「まあ、何うしたと言ふのだね、お前、變ぢやな
いか。いけないね。」

とたしなめながら、

「可哀さうでございますから、あの
取做すが如くにいふ。」

「いゝえ。」

と、にべもなく言ひすてゝ、袖も動かさで立ちた
りき。少年は上目づかひに、腰元の顔を見しが、涙
ぐみて俯きぬ。

雪の碎けて落散りたるが、見る／＼水になりて流
れて、けぶり立ちて、地の濡色も乾きゆくを、怨め
しげに瞻りぬ。

「さ、おくれよ。いゝのを、いゝのを。」
と貴女は急込みてうながしたり。

こたびは鋸を下に置いて、筵の中に残りたる雪
の塊を、其まゝ引出して、両手に載せつ。

「み、みんなあげよう。」

細りたる聲に力を籠めて突出すに、一掴みの風冷
たく、水氣むら／＼と立ちのぼる。

流るゝ如き瞳動きて、雪と少年の面を、貴女は

屹とみつめしが、

「あら、こんなぢや、いけないツていふのに。」

といまは苛てる状にて、はたとばかり掻退けたる、

雪は、迂り落ちて、三ツ四ツに碎けたるを、少年の

あなやと拾ひて、拳を固めて掴むと見えし、血の色

颯と頬を染めて、右手に貴女の手を扼り、ものを

も言はで引立てつ。

「あれ、あれ、あれえ！」

と貴女は引かれて倒れかゝりぬ。

風一陣、さら／＼と木の葉を渡れり。

第三章

腰元のあれよと見るに、貴女の裾、袂、はら／＼と、柳の絲を絞るかのやう、細腰を縫りてよるめきつゝ、ふたゝび悲しき聲たてられしに、つと駈寄りて押隔て、

「えゝ！失禮な、これ、これ、御身分を知らないか。」

貴女はいき苦しき聲の下に、

「いゝから、いゝから。」

「御前——」

「いゝから好きにさせておやり。さ、行かう。」
と胸を壓して、馴れぬ足に、煩はしかりけむ、穿物を脱ぎ棄てつ。

引かれて、やがて蔭ある處、小川流れて一本の桐の青葉茂り、紫陽花の花、流にのぞみて、破垣の内、外に今を盛りなる空地の此方に來りし時、少年は立ち寄りぬ。貴女はほと息つきたり。

少年はためらふ色なく、流に俯して、掴み來れる
件の雪の、炭の粉に黒くなれるを、その流れに浸し
て洗ひつ。

掌にのせてぞ透し見たる。霏ひた／＼と滴りて、
時の間に消え失する雪は、はや豆粒のや／＼大なるば
かりとなりしが、水晶の如く透きとほりて、一點の
汚もあらずなれり。

きつと見て、
「これでいゝかえ。」といふ聲ふるへぬ。
貴女は蒼く成りたり。

後馳せに追續ける腰元の、一目見るより色を變へ
て、横様にしつかと抱く。其の膝に倒れかゝりつ、
片手をひしと胸にあてゝ、「あ。」とくひしばりて、
苦しげに空をあふげる、唇の色青く、鐵漿つけたる
前齒動き、地に手をつきて、草に縋れる眞白き指の
さきわなゝきぬ。

はツとばかり胸をうちて瞻るひまに衰へゆく。

「御前様 ー 御前様。」

腰元は泣聲たてぬ。

「しづかに。」

幽なる聲をかけて、

「堪忍おし、坊や、坊や。」 とのみ、言ふ聲も

絶え入りぬ。

呆れし少年の縋り着きて、いまは雫ばかりなる氷
を其口に齎しつ。腰元腕をゆるめたれば、貴女の
顔のけざまに、うつとりと目を ■ き、胸をおした
る手を放ちて、少年の肩を抱きつゝ、ぢつと見てう
なづくはしに、がつくりと咽喉に通りて、桐の葉越
の日影薄く、紫陽花の色、淋しき其笑顔にうつりぬ。

【完】